

講演 (三) カール・バルトの神学について

講演者 滝 沢 克 己

司 会 本 田 正 昭

司会 いままでの討論で、しばしばカール・バルトの神学が問題になりましたので、参加者の希望もあり、はじめの予定にはなかったことですが、たゞいまから滝沢先生のバルト観をお話していただくことにします。滝沢先生、どうぞよろしく。

滝沢 私がカール・バルトのところに行きましたのは西田先生のお奨めで、その頃ハイデッガーは初期でしたから、不安とか死というようなことはよく論じていたわけです。西田先生は、ハイデッガーには一番大事なものを、つまり神が欠けている、と言われてですね。留学するならカール・バルトのところが良いと奨めて下さったのです。

ボンに行ったのは一九三四年の四月で、バルト先生は当時ドイツを支配するようになっていたナチに協力を拒否したので、十一月にはやめさせられたのです。ですから講義を聞いたのは一学期とちょっとでした。しかし裁判があったりして

次の年の四月まではボンに居られたものですから、一年間、直接先生についていろいろ学ぶことができたかと思えます。

バルトはもちろんキリスト教の伝統の中から出て来た人で、自由にものを考えるということ、はじめから身につけておられたと思うのです。最初、牧師をしていたときに、近所の労働者たちと親しくなって、孤軍奮闘して資本家とわたり合つたと聞いております。宗教社会主義——これはキリスト教社会主義とはちよつと違うのですが——そういう関心が非常に強かった人です。

そうしているうちにバルトは、近代のいわゆる人間中心主義的な考え方は全く違うものが聖書またキリスト教にはもともとあるということに気が付いてですね、大いなる喜びを以て「発見」したのは、人間の罪にも拘わらず神さまが自分のところにも来ておられるということですね。そういう自覚、

発見が最初にあったんだと思うんです。それは聖書を通しての発見でしょうけれども、しかし発見したのは自分自身のことから発見したわけで、それでそこから聖書を読み直し、教理をかえりみてみると、近代神学が軽視するようになってまともに相手にしなかった古い教理、あるいは聖書の古い言い表わしの中に、近代では抜けてしまった大事なことが言い表わされている、ということに気が付いたのだと思います。

その唯一つの大事な事実をカール・バルトは聖書とともに「イエス・キリスト」という名で呼んだのですけれど、しかしその大事な点はバルト自身のところにあるし、誰のところにもあるし、時代や環境を超えているもので、誰にでもじかにわかるはずだと思つたのですね。時代も環境も国も超えているというとか何かひじょうに抽象的一般的にきこえますが、そうではなくて、そうであつてはじめて本当に具体的なことがわかるという考えが最初からあつたと思うんです。絶対に人ではない、本当の主体と、罪深い自分自身とが、罪にも拘わらず、しかもそこには罪が入ってくる余地がないように結びつけられているということが基本になる考えなんです。そこからイエスの処女受胎とか、言葉や業とか、十字架とか、さらに聖書に書いてあることのすべてですね、それをその点から解釈しているわけですね。ですからたとえば処女受胎というものは、そこに成り立ってきている神との結びつきというものは絶対に人間の側からは出ないということなんです。

聖霊によってマリアがみごもつたということは、そういうことを意味しているのですね。

私はボンに行つて、ちょうどこのことを聞いたのです。それはもう、すぐひじょうによくわかつたのです。西田哲学でいまままで読んでいたその点が、もつとはつきりしたんですね。すなわち自己成立の根柢に何があるか、ということ。それから山上の垂訓にしても、それはただ、神と人とが厳密な区別と逆にできない秩序を持ちながら直ちに一であるという、そこから読むとはじめて読めるので、そこを抜かして読んだらわからないですね。わかつたつもりでも、その点を抜かしたら、山上の垂訓は律法になつてしまふということです。それから十字架ということは、神さまが人間の罪の全体の重みを担う、耐え忍ぶ、ということなんです。そういうことがいまま・ここにあるんで、十字架はそのことを意味している。人間の罪全体の重みを以てしても潰れないものがある。だから復活ということは、人に無視され踏みつけにされ、それをちゃんと受けながら、そこに生きているものがあると、復活とはそういうことだと、ですね。それからイエス・キリストの昇天ということは、イエスの姿が消えてしまつても、キリストはここにいらつしやると。キリストは始めからあつたもの、いままもあるもの、最後まであるもの、最後に来たりたもうもの、と。

ですから、バルトには、イエスが生れたから、イエスが来たから、人の罪にも拘わらず神人一体ということが成り立った、という考えが残っていますけれど、しかしそれだけでは、むしろそれはバルトが昔からの教理に引かれて、あとから構築したようなことだと感じた方がいくらいなことです。その証拠は、イエスが生まれてそこに成り立ったというけれども、バルトの場合、可視的なイエスの形には重心がかからないんですね。だからイエスという名で呼ばれているのは、神ともにいますという、神と人との絶対に敵しくして親しい結びつきのことですから、その結びつきというものは決してそこにだけあるものではない。それは世の始めからあるものなので、聖書がイエス・キリストという名で呼んでいる神人の結びつきと限界、関係ですね、そういうもの世の始めからあるので、ヨハネ伝の冒頭に「はじめに言があった……それに由らずして成ったものは何もない」と書いてあります、そのはじめのロゴスというものは、イエスという名で呼んでいいものだ、と言うんですね。はじめからそういうふうな敵としてあったものがあとからもう一回生まれるなんてことはないわけで、それははじめから貫徹しているわけですね。

そこをふまえていますから、バルトは聖書をとても大事にしました。聖書からでなければ聞けないような言い表わしがあるというんですね。しかし聖書主義になるとか、聖書を絶

対化するということのようなことは決してないと、はっきり書いておられるのです。さきほど申しましたところから、人間のことすべてを考える。たとえば心身の関係、あるいは伝統や教会や、国家と教会の問題ですね。心と体ということについてバルト先生が書いておられることは、神人の限界点・接点をふまえないと読めないですね。そこをふまえるとはじめて心と体の関係というものがはっきり出てくるので、それはイエスをみつめることでわかっていくことですね。私はバルトほど心身の関係をはっきり述べた哲学者を知らないです。禅では身心一如だけでなく身心脱落といえますね。脱落点というものは、ものが神さまによって事実存在するというところですね。そこにはまだ心とか体とか主体化ということがないですから、それが主体化してくるとそれが心身の関係なんですね、主体といってもみなそれは客体的主体で、無機的なものまで含めてですね、もともと主体でないもの、働けるものが働くということなので、その主体化が高度になって、それが人間が創作する、ということですね。

すると人間である、人間として成り立ってくる、ということと、罪ということは違うことがわかる。助けは来ているわけですから、単純明快で明るいですね。では罪を楽観しているかというところではない。そこではじめて罪というものがあるかというところ、罪のどす黒さ、果てしなさを、それがどんな恐ろしいことを惹き起こしつつあるかということ、人間

は罪の塊みたいなものだということもよく見えてきます。でもそれにたじろぐということがない。何故かというのと、罪の根源は何もない、単なる虚無だということがはっきりわかっているんですね、だから罪の頭、罪そのものは、いま・ここで完全に滅ぼされているのです。にもかかわらず人間はその罪に、虚無に躍らされているということで、そういう人間に対して愛とか憐れみ深い気持を持つということがそこに起こってくるわけです。

キリスト教で、まず罪を説いて、罪からは自分も他人も救われぬから、罪の世界からかけ離れた天から下りて来たキリストにつかまって救われる、こういう説き方がありますが、バルトはそれをやらないです。それは罪を軽く見ているようにですけど、そうではなくて、罪が入る余地のないところをふまえているからなので、ですからどんなに罪深いものがあるけれども、どんなに恐ろしいことが起こっても、それにたじろぐということがないです。ふつうはそういうことを知らないから、罪の世界を神から切り離してまず立てる、ということをやるので、そうすると、目に見えるイエスの姿が唯一のつかまりどころになりますから、そうすると聖書の絶対化ということが次々に起こってくる。それはバルトとは根本的に違うんです。宗教改革にも、罪を楯にして、そこからの救いをただ信じるのだということがありますが、バルトはそうではなく、全然逆なんです。始めにちゃんとしたことがあ

る。そこから見ますと、ルターもカルヴァンも駄目だということ、教理を批判的に継承してゆくことになるんです。

それでしまいに、イエスがあらわれたということは、それで神と人との結びつきがはじめて成り立ったということではなくて、それははじめから成り立っているのです、罪が入ってきたからといってそれで揺ぐことはない。ではイエスが現われたことで何が成り立ったかというと、人間の側に、その原決定・原関係に完全に照応する姿が現われたということだということです。最後の講義では、第一義のインマヌエルははじめからあるので罪が入ってきてもどうということはない、イエスの登場によって何が成り立ったかというと、それは第二義のインマヌエルが人間の側に完全に生じたということなので、そう解釈し直すと、教義学の全体を書き換えなくてはならないと、しまいに感じておられたと思うのですね。

そういう点がバルトの学会で問題になったというのですけれど、いまのドイツで一番優れたユンゲルという若い神学者が、その前の学期に学生とゼミをやった問題のテキストを読んだ。そのときに宮村君という、もう数年間もユンゲルのところにいる学生なのですけれど、その宮村君が、これは滝沢の言っていることではないか、滝沢の考えがここに爆発して出てきているのではないかと言ったたら、ユンゲルが、どうもそういうことらしい、と言ったというんですね。ところが、そう言っておきながら、学会では何もそれに触れない。それ

はいかに向こうのいわゆるバルティアーナたちがバルトを本
当に理解しないで、バルトのもっとも嫌った正統的な聖書主
義に落ちていったか、ということなんでしょうね。

しかしバルトははじめっから右に申したようなことなん
です。私がボンでバルト先生にそういう質問を出して議論して
いたとき、西田哲学には絶対矛盾的自己同一ということがあ
って、それは先生のインマヌエルということに当たる、もっ
とも西田先生はそこにどういふことがあるかはつきりは言っ
ていないけれども、しかしたしかにそれをふまえていると思
うと言っている話したのです。そしたらバルト先生は、
そういうことはありうるのだとおっしゃって、どうか西田
によろしく、と言われたのです。それからバルト先生がドイ
ツから追い出されてバーゼルに帰ったので、これから雑のと
ころで勉強したらいいかバルト先生に尋ねました。私はドイ
ツ政府の給費生ですからスイスへは行けなかつたんです。そ
したらバルトマンのところへ行けと言われたのですけれど、
私は前にバルトマンの『イエス』を読んでいましたですね、
これはまるで違うと知つたわけですよ。でも切角のバル
ト先生のお奨めだからバルトマンのところへ行つて、新約学
のこまかいことは私にはよく解りませんでしたけれど、ブル
トマンの *„Glauben und Verstehen“* という論文集が
当時二冊出ていましたけれど、それを詳しく読みました。す
るとやっぱり全然違うんですね。ちょうどその頃バルトマン

がクルマンと議論していたものですから、それを取り上げ
て、いかにそれが違うかを書いたものをバルト先生に送つた
ところ、バルトマンに対する批判は、それは基本的には君の
言う通りだとおっしゃつたのです。ただひとつ、必ずしもイ
エスという名でなくても、同じ神の救い、恵みを言い表わす
ことができる、そういうことがキリスト教会の壁の外で起つ
ていないなどと誰にも断言はできないと、私が最後の一ペー
ジに書いたんですね。そしたら先生が、これは *Evangelium*
the Theologie 誌に載せたいと思うけれど、最後の一
ページは省いてもいいかと尋ねられた。それは一ページでは
どうせ議論できないことですし、それを省いても主旨はちゃ
んとあるんですから、省いても構いませんと言つたら、先生
はほんの三十秒ぐらい考えられてですね、いや、これは全部
載せよう、そういつてですね、載せて下さつたのです。

毎週水曜日に *„Tener Abend“* という座談会があつて、
学生が二百人ぐらい集つてですね、そのときに学生がその週
の講義について質問をするんです。そこで私が「それは違う、
こういう意味です」というようなことを申しますと、先生が
深くうなずかれて、その通りだということが度々あり
ましたのです。だから私がよくわかっているということも先
生にはよくわかつておられたのです。ですから、私がバルト
を読み違えている、ということはないだろうと思つたんですね。
これは相対的判断ですけれど。

講演(三)に関する討論

司会 本 多 正 昭

司会 ではただいまの御講演について討議をお願いします。
土居 滝沢先生のバルト理解について武藤先生のお考えを伺いましょう。

武藤 滝沢先生のバルト理解について大変深い理解ですし何も申し上げることはありませんが、ただ、バルトの神学は聖書主義 (Bibliozismus) ではなくてもやはり全体として聖書原理 (Schriftprinzip) の上に立っているのではありませんか。

滝沢 いえ、それは、バルト先生は聖書原理を言ったことはいないと思います。

八木 そんなことないと思うんです。私は実は滝沢先生のバルト理解を学んで面白かったから、それまで新約学を専攻して、あまりバルトを読んでいなかったんですけど、本気で丁寧に読み始めたんです、『教会教義学』を、『プロレゴメナ』から『神論』まで読んで、どうしても滝沢先生のバルト解釈は正しくないと思わざるを得なくなりました。でも気になるから、いろいろな人のバルト論も読んだけど、や

っぱり滝沢先生のバルト理解は違っている。いや、私は、事柄としては滝沢先生の主張は正当だと思っているんですよ。バルトより正しいと思います。でも、滝沢先生のバルト理解

は納得できない。いま武藤先生がおっしゃったように、バルトは聖書主義者ではないけれど聖書原理はバルト神学の根本にある。聖書が証しするイエス・キリストが、そしてそれだけが神の啓示だというのが、バルトの神学基礎論(『プロレゴメナ』)の一貫した主張です。そして古代以来の正統的教義からはずれてもいない。たとえればバルトは、ナザレのイエスを主語として、あのイエスが神なのだ、という風に語るのです。

滝沢 教理ということを取り出して言えば、キリスト教が唯一だという気がバルトにはあるわけですよ。だからバルトは、バルトがイエスという名で呼ぶものですね、そこから離れて立ってはいけないという。だからイエス自身が神なんだということはひとつどうしても言わなくちゃならんことなんですよ。

八木 ナザレのイエスがそのまま神だというのはおかしい。それは滝沢先生のイエス理解とも違う。滝沢先生の場合、イエスは他の人と資的に異った神的存在ではない。

滝沢 イエスは神とひとつでなければね。

八木 「ひとつ」ならいいけど、でもバルトは他の人については、その人が神だなんて言わない。

滝沢 ね、だからそれは、バルトはイエスについてだけ第一義の接触と第二義の接触の区別を認めなかったということですよ。

八木 バルトが聖書を公理にしている点はどうですか。バルトは、聖書が証しするイエス・キリストだけが神の啓示で、何故聖書なのかということについては、我々は責任を負えない、聖書自身が責任を負うことだ、と言う。

滝沢 聖書が典拠であることを基礎づけるなんて、できもしないしする必要もない。もっとも唯一の典拠だという言い方はだんだん変わってゆくんですけどね。で、何故バルトが聖書を大切にされたかという点、哲学的に言い表わしたり非神話化したりすると、みな違ってくるからで、バルトがここが肝腎だということを本当に明らかに躍動的に言い表わしているのは聖書で、そこをバルトが発見させたのも聖書なんです。八木 だったら聖書の権威だって「そこ」から基礎づけられることになるでしょう。

滝沢 だから聖書の権威は、結局、バルトがイエスという名

で見ていた、神人の原関係から与えられてくる、と。

八木 いや、バルトはそうではなくて、聖書が証しすることだからそこが原関係だ、と言う。だから親鸞の浄土真宗がどれほどプロテスタンティズムに似ていても、真宗の信仰の対象はイエス・キリストでないから、真宗は偽りの宗教だ、ということになる。もし原関係から宗教的表現を見ているのなら、簡単にそうは断定できないはずですよ。

滝沢 あれはバルトの初期で、バルトはだんだんそこから抜け出て、晩年にはもう、キリスト教会の外に救いは十分ありうると、キリスト教徒が他の宗教の前に、神さまについては自分の方がよく知っているなどと思って行ったら絶対にいけない、と書いている。

八木 それがバルトの中心思想だとは思えないですね。それに、先生のバルト理解が正しければ、バルトは非神話化を遂行していたことになりませう。

土居 私は一応バルトのドグマテイクを通読したつもりなんですけど、一番気になるのは罪の理解ですね。バルトは、罪は *das Nichtige* で、神が創造に当たって見過し給うた可能性だ、というような説明をしているんですね。罪には實在性がないと言う。これでは悪は善の欠如だというギリシア的な理解になってしまっただけで、聖書とは違う。

滝沢 いえ、違わないと思いますね。

小野寺功 父・子・聖霊は三位で一体ですが、父と子と一体

の聖霊の場ですね、それと、西田哲学でいう矛盾的自己同一の場所の関係はどうですか。西田哲学の場合、自己成立の根柢には矛盾的自己同一があるわけですね。

滝沢 私が「信仰の根柢はただひとつ、三一の神である」ということを書いたドイツ語の論文を西田先生にお送りして、信仰の根柢はこちら側には全くないということですね、そしてたら先生が読んで下さって、全くその通りだとおっしゃったのです。絶対矛盾的自己同一ということは、神の全体がここにあるということで、神と人とは普遍と個ということで区別はできますが、神の働きは有限の個物に及ぶということでですね、それが聖霊です。西田先生が三一の神についてどうお考えかは聞きませんでしたけれど、信仰が成り立つ根柢がそこにあるということは感じておられたんですね。ただ西田先生の場合は悪魔というようなことが体系の中に出てくることがありますけれど、しかし罪というものは虚無なので、人間は虚無に陥らされる。それが恐ろしいんです。罪は深刻な問題だけれども、でも罪に押し潰されるとかたじろぐとかいうこととはないのです。久松先生がいつか禅の方の闇は闇でもどこか明るい闇なので、真言密教の、引き入れるような闇じやないとおっしゃっておられました。その点もバルトに非常に近いわけですよ。バルトの場合も、罪は底なしの暗い淵でも、暗いまんまでそれに耐えて、それと戦う力が出てくるような見方なのです。

小野寺 三位一体ということと、絶対矛盾的自己同一というものは、先生のお立場ではどういうようにお考えになりますか。

滝沢 インマヌエルの神ですね、それを論理的な言葉で言いますと、有限の人と絶対に人ではない絶対無相の神とが全く違いながら直ちにひとつだと。そこには何か隙は全然ないわけです、神と人との間にね。その限りで神はひとりの人とひとつである。それが御子で、すると御子はあらゆる人のところにおられるわけですね。ということで、父と御子とは等しいといえる。そういう論理構造は西田先生にあるんですけど、しかし悪とか罪とか悪魔とかいう問題について、その虚無性をはっきり教えてくれたのは、私の場合、西田哲学ではなくてバルト神学だけなんです。

小野寺 先生のお考えを聞いていますと、キリスト教を革新するようなすばらしい要素があると思うのですけれど、先生のお考えは聖霊論的ですね。聖霊経験の持つ重要性というようなことは、バルトと滝沢先生の場合、どのように位置づけられるのでしょうか。

滝沢 なにかコーラーさんが、バルトは聖霊論を書きたいと言っていた、というんですね。それから寺園君が、滝沢の神学は聖霊論に行くと言っていた。しかし既成の教義学の流れの中で、いままで父なる神を問題にしていたから、これからは聖霊だ、ということでは全然ないんですね。聖霊をほん

うに大事にするということは、御子と父とを大事にする、ということのほかではないわけです。イエスから離れて神はいないということをはっきり言うことは本当に大事なので、それを言わなかったらギリシア流になるわけです。それを言った上で、肉のイエスの位置がどうなるのかということを詳しく考えればいいわけです。イエスが神の子キリストであるという、その「である」の意味を厳密にしなくてはいけない。ただ、「である」では怪しからん、というのではなくてですね。バルト神学はそれを正確にやっているし、西田先生の論理も助けになる。ところで私はひとつだけ聞きたいのですが、久松先生の場合には一に力点が置かれているけれども、私の場合には分離という感じがするということだったのですけれど、神と人との間には隙間がないわけです。神と人とがひとつである、不可分であるとは、そういうことで、隙間がないわけですね。ですから隙間のない点をよくふまえて、よく心眼をこらすと、一方的に神さまが先だということがわかってくるんです。だからふたつに分けてどっちが先ということとは全然違うんですね。隙間なくひとつだということを踏まえなくては神さまが先だなどということは言えないんです。そこをふまえないと、神さまが先だといっても人が何もしなかったらどうにもならんじゃないかという考えがどうしても出てくるのですね。

土居 イエス・キリストを越えて、抜かして神を考えると

うことは、聖書の証しとは違いますね。西田先生や久松先生の場合は当然として、バルトも聖書が証しするイエス・キリストを抜かして、あらゆる人のもとに神が在ると言っているんですか。

滝沢 レーゲンスブルクにウールリッヒという、日本に来たことはないけれども仏教にひじょうに興味を持っているカトリック哲学者がいて、マルクスとかニーチェとかについても、ふつうの神学者とは全然違った見方をしているんですね。その人と会うことになっていたのですけれど都合で会えなくなつた。で、その人が手紙をくれて、私が何かにイエスがいます。ここで血を流して嘆いておられるということを書いたのに共感して、三重のアンダーラインを引いて「あなたは私を理解しておられる」と書いてきました。それは何か、歴史的にあらわれたイエスの姿にしがみつくといいことではないんですね。むしろ具体的に普遍的な基盤に立つときに始めて言えるわけで、ウールリッヒもそうだから、仏教に興味を持つのでしょう。このように、教会の外に救いがあることを認めるカトリックの人がだんだん出て来て、プロテスタントの側がその対応に大わらわだつてことがあるようですね。安井君という人が、これはヨハネと道元とドストエフスキーについて大きな論文を書いた人ですけれど、そう手紙に書いてきました。

武蔵 滝沢先生の、神と人との第一義の接触と第二義の接触

ということとは、バルトはそういうことを言っているのですか。
滝沢 それはバルトがインマヌエルⅠとインマヌエルⅡという
ことを言いましたので……。

武藤 それはどこに書いてありますか。

滝沢 私は非常に印象深かったから、それを覚えていたので
すけれどね。バルトにマルクス・バルトという息子さんがい
て、私が「バルトにおける宗教及び宗教批判」という発題講
演をバルト研究会でやって、インマヌエルⅠとインマヌエル
Ⅱのことを言ったら、それはいまのバルトの弟子達はよく知
らないから説明を加えた方がいいというので、びっくりした
のですけれどね。私はいま何巻の何頁にあったというような
ことは言えませんが、しかし索引がありますから……。

武藤 それを言ったのは晩年のバルトですか。

滝沢 いえ、むしろ始めの方だと思います。私は既にボンで
インマヌエルということを知っていますから。

八木 インマヌエルという言葉は、『教会教義学』のはじめ
の方からあると思います。

滝沢 ありますね。

八木 ただですね、インマヌエルといった場合、滝沢先生
は、それは無条件に各人の自己成立の根柢に神がいますこと、
神の働きが来ていることとおっしゃいますね。それは人間の
救いの充分条件であるわけですね。私は事柄としてはそのお
考えに賛成なんです。ただ、バルトの場合はですね、インマ

ヌエルとはイエス・キリストのこと、あのときあそこに現わ
れた方のことですね。マタイ福音書でもそうですね（一・二
三）。インマヌエルとは、あのときあそこに人として現わ
れた神イエス・キリストが我等とともに在したもうた、在し
たもうことでしょう。滝沢先生はインマヌエルを滝沢先生の
意味でおっしゃるし、バルトはバルトの意味で使う。ところ
がそこから先は、すべてをそこから見るから、お互いに共感
できることになる。それで滝沢先生は、バルトも滝沢先生と
同じ意味で使っているとお考えになるのではありませんか。
お互いに相手の言葉を自分の意味に了解して共感していたの
かも知れない。だからバルトのインマヌエルを滝沢先生の意
味にとるならば、バルト神学は全体として共感できるんでき
ね。

本多 では滝沢先生はバルトの隠れた姿に新しく照明を与え
たことになる（同、笑）。

滝沢 もし八木君のバルト理解がバルトの主眼だったら、日
本のバルト主義者のバルト理解が止しかったことになります。
そんなこと、もう、全然ないですね。

八木 それからもうひとつだけ。バルトは、教会教義学とは
カルヴィニズムが正しいのだ、自分の立場はカルヴィニズム
で、ルター派は兄弟だけでもすっかりは認められないと明
言していますね。

滝沢 ええ、ただカルヴィンも駄目だと。

八木 駄目だといつても宗教改革者の聖書原理やキリスト中心主義を放棄したわけではないでしょう。

滝沢 こちら側に出てきたいろんな形に重点を置かないということですね。

西村 私はね、働きというと既に二元に出てきてですね、建立面で働くので掃蕩面では働きということとは出ないと思つていたらですね、先生が、第一義のインマヌエルに既に働きの原点があるとおっしゃって、それを聞いたのが今回の最大の収穫ですが、わるくともキリスト教にはそれがあつたわけですね。有賀先生からハヤトロギーということと神の存在と働きはひとつだと聞いたのですが、それは仏教にもあるのかなと思つてですね。私は私が花を見て赤いと思つ以外に、それに先立つ働きはない、御飯を食べることのほかに、その成立の根拠はないと、信じてやまなかつたのです。それが、働きについてまで、日常の具体的身体的な働きに先立つものがあると聞きますとね、これは仏教にもあるのか、あるいはあまり知りすぎてクリスチアナイズされたいかんのかと……

(大笑)……よく自分で考えますわ。

滝沢 私は、一番はじめに私にも支えがあるということを見したと申し上げたのですが、その支えはですね、全然私の働きに依存しないです。そうでなかつたら、私の働とちよつとも相互的であつたら、それは本当の支えにならないですよ。私はね、多の一ではない本当の一ですね、その一におけ

る多の一、そういう本当の一は認める。それから本当の一と、一々の多の中の一との隙間のない一ということね、それも認めます。それを認めると、私の言うような絶対不可逆がどうしても出てくるんですね。

西村 先生ね、万法は一に帰すというでしょう、そしてその一はどこに帰するかとね。正解は万法になるわけです。万法が一に帰して、その一がどう働くかというのではなくて、一がどこに帰すかと、それは万法に帰するわけですね。で、万法が一に帰して、その帰した一が先生の第一義なら、その第一義のもう一つ奥に第二義があるとね、そういうふうにさえ思つてきたのですね、一がどうも一番奥にあつて、そこから第二義の方法が出てくると、先生は言われる。

滝沢 いや、多の中の一ではない本当の一の向こうにまだ何かあるというね、そういうことはないですね。

西村 すると事事無礙法界というようなことは先生の理論ではどうなりますか。

滝沢 事とはやはりいわゆる偶発的な事実存在ですね。

西村 そこに一が及んでますか。

滝沢 ええ、それはそうです。

西村 一が及んだら事事無礙法界にならないでしょう。

滝沢 どういうことですか。

西村 一においても残つていたら事事無礙法界ではない。滝沢 個は一において徹底的に決定されている、ということ

です。それが同時に私の責任を成り立たせるわけで、両者は別のことではないですね。事無礙というときには、根源的な本質規定と事実存在ということとを言わなくちゃならないですね。

西村 それは理事無礙でしょう。

滝沢 事実存在は本當の一においてある、ということがあるんですね。事実存在がそれにおいてあるという、その一は、決して理、いわゆる理じゃないですね。

西村 そうです。一を吸収し切った場です。

滝沢 ええ、そうです、そうです。

西村 もう吸収し切って、吸収し切ると同時に、その一を捨てるんですね。そうでないと……。

滝沢 ええ、そうです。

西村 そうでないとはんとうの意味で多になり切らないということですね。すると、あとではですね、事無礙法界は、一を吸収しさらに抜けた、個物と個物との協調関係だと。するとそこにあるのは、もう協調関係ですから、いわゆる可逆的關係だけがあるんであって、どっちが先なんてことはないですよ、やっぱり。

滝沢 有限の事実存在の世界に起こってやることは、みな、ある種の不可逆性はあっても、相対的ですね。

西村 そのとき、少しでも一をとどめてはいかんと教えられてきたわけですね。

滝沢 向こうの一角がこちらに干渉してくることはないです。

こちら側は徹底的に決定されていて、だからこっちのことはこっちのことなんです。多はどこまでも多なんです。

八木 でもいつも多の根柢に不可分・不可同・不可逆があるわけでしょう。

滝沢 ええ、そうです。

八木 すると事無礙法界ではない、という感じがする。

西村 そう。もう三十年らい、久松先生からずっとね、禅はこれしか言わないんだぜ、神なんてないんだぜ、ね、お前の手をあげたり足を動かしたりするところにしか真如はないよって、仕込まれたんですよ。それが最近、こういうところに出入りするようになって（一同、笑）

本多 滝沢先生は久松禅に「反対」というのではなくて、一義と二義の区別をつけることによって、はっきりさせたいことがあると言っておられる。

滝沢 そうしないと、イエスについてバルトが見たものしか、覚者について見ないことになりすね。

西村 もうひとつ申し上げたいことがあるね。八木さんあたりが久松先生に接触されて、あの人の視点で、無相の自己についてこう解釈できるんじゃないですかとつめるとね、久松先生は、そもそもあ言えるねえという形でね、何か無相の自己が形而上化していく気がしてならんです。それが寂しいわ、私は（一同、笑）

滝沢 それは私も感じるんですね。

八木 それがいけないんら対話なんか止めた方がいいんじゃないですかね。久松先生は形なき自己に覚めて時空超え、といつも言っておられたし、私の方は、「神も人もない」無分別のところがあるなどと言うものだから、滝沢先生から疑いの眼で見られているんです。

司会 もう時間です。あとは来年。来年またやりましょう。(以下、反省と総括、将来への展望は省略)

高階瓏仙禅師著

清談金剛經

平易に説いた金剛經の註解

定価五〇〇円
送料二五〇円

花本貫瑞老師著

金剛經に生きる

定価一六〇円
送料二〇〇円

千地琇也画伯 えと文

インド仏蹟と古代美術の旅

定価六〇〇円 送料二五〇円

発行所 中央仏教社

秋田県河辺郡河辺町和田

坐禪に生きた

古仏耕山

秋月龍珉著
柳瀬有禅

定価一六〇〇円 300



加藤耕山老師隨聞記
長い修業の末、且は仏様になり、すっぽりかんと赤の凡夫に立戻られた禅界の巨星・耕山老師の遍歴と徹底した境地に仏道の本質をみる。定価一六〇〇円 300

無門関を読む

天龍寺僧堂師家
平田精耕著 上・中・下巻

長年多くの雲水を育ててきた著者が、深い参禅体験と世界的視野から「無門関」全四十八則を読みこなし、闊達自在な禅の世界へ導く。社会的话题も交えて日常生活の中にある禅を語る。各巻定価一五〇〇円 300

柏樹社 〒113東京都文京区千駄木2-8-3
☎03-827-8431 振替東京0-33724